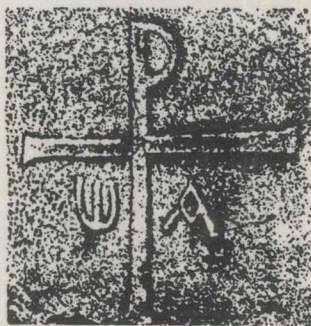


ヘラクレイデスとの対話

オリゲネス 小高毅訳

キリスト教古典叢書 13



上智大学神学部編
P. ネメシエギ責任編集
創文社刊

オリゲネス

ヘラクレイデスとの対話

小高毅 訳

ΩΡΙΓΕΝΟΥΣ ΔΙΑΛΕΚΤΟΣ
ΠΡΟΣ ΗΡΑΚΛΕΙΔΑΝ
ΚΑΙ ΤΟΥΤΣ ΣΤΗΝ ΑΤΤΩ ΕΠΙΣΚΟΠΟΥΣ
ΠΕΡΙ ΠΑΤΡΟΣ ΚΑΙ ΥΙΟΥ ΚΑΙ ΨΥΧΗΣ

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
キリスト教古典叢書

小高毅（おだか・たけし）

1942年生まれ。

1976年聖アントニオ神学院（哲学・神学）卒。

1978—1980年 Augustinianum. Institutum Patristicum (Roma) に学ぶ。

1984年 上智大学神学部神学博士，

〔訳書〕 オリゲネス『諸原理について』、『雅歌注解・講話』、『ヨハネによる福音注解』、『祈りについて・殉教の勧め』（創文社）

著書 『オリゲネス』、『古代キリスト教思想家の世界』（創文社）

〔ヘラクレイデスとの対話〕

〔キリスト教古典叢書13〕

昭和61年 7 月25日 第1刷印刷

昭和61年 7 月30日 第1刷発行

定価 2500円

編 集 者 上智大学神学部

編集責任者 P・ネメシエギ

訳 者 小 高 毅

1316-392130-4226

発 行 者 久保井理津男

発行所

株式会社

創

文

社

〒102 東京都千代田区一番町 17-3

電話 03 (263) 710 1(代) 振替東京2-92472

落丁・乱丁はお取替えします

堀内印刷・鈴木製本

序言

対話することは、人間にとって決して容易なことではない。ある人々は自分の考えだけが正しいと思い、他人の言っていることを真剣に聞こうとは思わない。また、ほかのある人々は、自分の考えの真実性について何の自信も持たず、相手もそうに違いないと思い込み、話し合いを、単に便宜上の妥協点を見いだすための手段として用いるにすぎない。どちらも、真の対話にはならない。というのは、人間という考える能力を持ち社会において生活する生き物にとってふさわしい対話とは、共に真理を発見する過程だからである。論争の場合、片方が勝ち片方が負けるが、真の対話の場合、勝つのは真理だけであり、敗北する者はいない。というのは、人間は本質上、真理把握に方向づけられている存在だからである。したがって人間にとって、真理にいわば「負ける」ことは、自分の本性を発揮することである。もちろん、このように自分の本質通りに生きるためには、人間に、心の清さ、欲望からの解放、深い謙虚さ、常に学ぼうとする精神的な若さが必要である。だから、真に対話のできる人は、決して多くはないのである。

対話一般についていえる以上のことは、宗教的対話、神学的対話についても確かにいえる。宗教史一般を調べたり、キリスト教神学の歴史を調べたりすれば、このことがよくわかる。事実、諸宗教の間に、また、キリスト教の様々な神学派の間に、実り豊かな対話はまれで、意見を異にする人々の間ではほとんどの場合、論争、相手の排斥、異端審問、力による圧迫、殺し合いなどが多く見られるのである。静かな態度で意見を異にする人と話し合い、自分のはっきりとつかんだ真理を支持しつつ、相手が納得するような形でそれを示し、相手の疑問を真

剣に取りあげ、対話している両側が共に認めている点を拠り所にしてそれを解明する宗教家、神学者は、「白い象」のようにまれな存在である。

ところで、オリゲネスこそは、このまれな人々のうちの一人だといえるのである。彼は権威の座に就いているかのように相手を打破したり、破門を言い渡したりしようとはしない。ただ、静かに話し合うことによって、相手の真理把握を助けようとする。多くの書物を読みこなし、総合的な世界観をはっきりとつかんだオリゲネスは、自分が見ている真理を相手もきくと見るようになるであろうという確信をもっているのである。しかも、人に教えると共に、オリゲネスは人から学ぼうとしている。彼の思想は決して折衷的ではないが、幅広い。その中に、聖書の教えと共にプラトンの思想も、信仰と共に理性も、正義と共に慈しみも、厳しさと共に優しさも入っている。オリゲネスのキリスト教は、何物をも排斥せず、すべてを包含し、統合するものである。

オリゲネス研究には以前から全力を注ぎ、すでに数冊の優れた著作を世に出した小高毅師が翻訳し解説してくれた本書は、このようなオリゲネスの姿をかいま見させるものである。だから、およそ千七百年前、アラビアで行われたこの対話の議事録は、現代人である私たちにとっても貴重なものである。様々の対立に悩まされている現代において、多くの人が、オリゲネスのように、真に互いに対話し、また、人々の間に真の対話を促進させる者になれば、それ以上にうれしいことはなからう。

一九八六年四月四日

上智大学教授

ペトロ・ネメシエギ

目次

序言	P・ネメシエギ	i
「トゥーラ文書」		三
オリゲネスと『対話』（オリゲネスの生涯再考）		二
一 『カンデイドゥスとの対話』		二
二 アラビアでの教会会議		六
モナルキアニズムと三神説（二神説）		五
『ヘラクレイデスとの対話』		三
引用箇所		七
解説の注		五

付録一（オリゲネスの生涯に関する古代の資料）	一三
付録二（オリゲネス『アレクサンドリアの友人達への手紙』）	一六
文献	一七
人物略伝	一八

ヘラクレイデスとの対話

「トゥーラ文書」

一九四一年の夏、エジプトのカイロ近郊で、古代のパピルス文書が発見された。その後の調査で、そこには、それまで全く知られていなかったオリゲネスの作品と、消滅したと考えられていたディデュモスの聖書注解が多数収められていることがわかった。当時、この発見に沸き立ったことは想像に難くない。ある研究家は、当時を振り返って、次のように述べている。「当時、戦時中ではあったが、その発見はエジプト全土で、学術界の関心はもとより、好古家たちの間でも狂騒を生じさせた。学者にとっても、古物商にとっても思いもかけぬ授かり物である、オリゲネスの未出版の多数のパピルス紙について逸早く噂が流れた。実際、古物商らはオリゲネスの名を口にして法外な取引をしていた。学者たちの方は、エジプトの博物館が回収もしくは買取に乗り出したこと(1)で満足していた」。

発見の経過

そもそも、この文書が発見される切っ掛けになったのは、エジプト駐屯中のイギリス軍が軍需品の保存庫を確保する必要に迫られたことである。この設置地として選ばれたのが、カイロ南方約一〇キロに位置する、トゥーラ(Toula)の採石地跡であった。この地は良質の石灰岩の産地として、古代から採石地となっており、坑道が掘りめぐらされていた。その廃坑が軍需品の保存庫に使用されることになったのである。イギリス軍は請負業者を

用いて、数世紀にわたって堆積した土石を排除させることにした。この作業中、多数のパピルス文書が発見されたのである。

後に、この地を訪れた一人の学者は、次のように報告している。「その採石場は」山腹に入口を有していた。崩れ落ちた岩々をよじ登って、そこに至る。かまどの扉を思わせる四つの大きな入口が、直径五〇〜六〇メートル位、高さは一〇〜一五メートル位の、ほぼ円形の大きな空間に通じていた。この円形の空間から、幅広く、高さも一〇メートルはありそうな、三つの坑道が延びており、それは山の中へと入り込んでいた。

我々は、ヨーロッパ人の作業監督とエジプト人の役人、更にその作業に加わっていた労働者の一人と話すことができた。彼らによると、パピルス文書は、坑道の一つの壁の裾のあたり、円形の空間の坑道の口から二〇〜二五メートル位離れた所にあった。そこには埃、砂土、石片が、およそ一メートルの厚さで、壁の裾沿に長く積み重なり、坑道の中央に向かって坂をなしていた。例のパピルス文書は、それを保護する物は何もなく、隠し場を設けるために準備したとはっきりわかるような物は一つなしに、この堆積の下にあった。問題の場所は採石場の入口から遠く離れており、物を読むにはあまりにも暗い所であった。

発見されたパピルス文書をどうしたかという質問に、労働者は答えた。彼らは役人に報告し、役人は監督に報告し、監督は警察に報告した。警察が来て、それまでだれも手を触れていなかった、パピルス文書を取りあげた。警察がそれを持って行った。その後のことはだれにもわからない、⁽²⁾と」。

彼らの言う通り、警察が来るまで、本当にだれも手を触れなかったのか、彼らの言う通り、この文書が分散するのは警察の手に渡ってから後のことなのか、知るすべもない。しかしいずれにせよ、このような発見の折にしばしまられるように、それらの文書は発見者たちの間で密かに分配され、その分配をめぐって口論、喧嘩を呼び、更に、吹聴、密告となつて、秘密は公になった。この段階で、既に多くの文書は古物商の手に渡っていたが、そこで回収された一部断片が、古代文化遺産管理局に送られた。こうして、「トゥーラ文書」の発見が世に知ら

れることになる。更に、ファルーク一世 (Farouk I. 在位 1936-52) の介入によって、後に「第三写本」とされる、ディデュモスの『伝道の書注解』の冒頭の一部分が、更には、筒状に巻かれパピルスに綴じられた三つの写本が回収された。この中の一つに、オリゲネスの『ヘラクレイデスとの対話』と『過越について』が含まれていた。一方、オリゲネスの著作を収めた、もう一つの写本は、カイロの大物古物商の手に渡っていた。これも、苦心の末に、買収され、現在、オリゲネスの著作を収めた二つの写本は、カイロの博物館に n° 88745, n° 88747-88748 の番号で収納されている。

他の文書は、様々な経路を経て、競売、密売され、エジプト及び外国の様々な研究所、蒐集家の手に渡っている。

これらは、発見から回収までの間に、分冊にされ、更に故意や過失やで分断され、羊皮紙と違って素晴らしいパピルス紙は捏損を増して行き、現在でも完全にその所在が知られ尽くされているわけではない。しかし、幸いなことに、ケルン大学の考古学研究所の努力もあって、その大部分はその所在が確認され、写真版あるいは校訂版が出版されている。

内 容

ここで発見されたパピルス文書は八冊の写本 (Codex) であった。各々は四枚のパピルス紙を二つ折にした十六頁からなる一綴を紐で綴じ合せたもので、内容によって各写本の頁数は様々である。各々、筒状に巻かれ、パピルスの紐でしばられていた。この八冊の写本に収録されていた作品は、以下の通りである。

一、オリゲネス文書

第一写本 (Codex I)

六綴八二頁（白紙の頁、欠損があつて数は合わない）

①『ヘラクレイデスとの対話』三〇頁

②『過越について』五二頁

第二写本 (Codex II)

六(?)綴一〇〇頁

①『ケルソス駁論』五九頁

第一卷の $\frac{2}{3}$ 強と第二卷の約 $\frac{3}{10}$

②『エンドルの口寄せ女に関する講話抜粋』三頁

サムエル記上28・3—25の講話の抜粋

③『ローマ人への手紙注解抜粋』三六頁

第五—六卷（ローマ3・1—5・10の注解の抜粋。ルフィヌス訳の三・1—四・10に対応する箇所）

二、ディデュモス文書

第三写本 (Codex III)

『伝道の書注解』

原本は二四綴三七八頁であつたようであるが、カイロ博物館に収納されたのは一六六頁と八〇断片であつた。ケルン大学考古学研究所の手で、断片を除いて、更に二八〇頁まで確認されたが、第四・七・九・十二・十六・十七・二四綴が未発見のままである。

第四写本 (Codex IV)

『創世記注解』

原本は二六〇頁から成っていたようであるが、発見されているのは十六綴二二二頁、更に第一綴の断片を加えて二三八頁が確認され、十七—三二、三五—四六、四九—五二、六一—六四、八一—一六四、一七三—一八六頁がカイロの博物館に収納されている。

第五写本 (Codex V)

『詩編注解』

原本が何頁に及んでいたか推定できないが、発見されているものの最後の頁は第二二綴の第二頁であるので、この綴が最後まで筆写されていたと仮定すると、少くとも三五二頁はあったことになる（実際には、第十四綴は十四頁しかないので三五〇頁）。

一九五五年には十四綴が回収されただけであったが、一九六七年までに二十綴二九八頁が確認されている。そのうち一七七—八、一九一—二、二八九—三三六頁はカイロ博物館に、一九三—四、二〇七—八、二四五—六、二五一—二、二五五—六頁は大英博物館（n. 2921）に収納されているが、他の頁はヨーロッパ、北アフリカの各地に散在している。

第六写本 (Codex VI)

『ゼカリヤ書注解』

二六綴四一〇頁（四一八頁はあったものと推定される）。ゼカリヤ書の末文まで注解は完了している。

二一—三四（ゼカリヤ 9・5—8）、二二—三四（9・9—10）、二四—三四（9・17）頁が未発見。二〇四頁のみエジプト博物館が収蔵、他は各地に散在している。

第七写本 (Codex VII)

『ヨブ記注解』

原本が何頁のものであったか不明。少くとも四一二頁はあったと思われるが、第一―十二と第十四―二六綴の二五綴三八八頁が確認されており、四〇―一八頁を除く、他のすべてがカイロの博物館に収納されている。一―一九二頁でヨブ 1・1～6・29、二〇九―四〇八頁でヨブ 7・20―16・2までの注解が筆写されている。

三、著者不明の文書

第八写本 (Codex VIII)

『山上の垂訓とヨハネ 6・3―38の注解』一綴十二頁

従って、一九六七年までに確認されているのは一、八〇八頁であるが、二、〇一六頁に及ぶ文書であったと考えられる。これらの文書はオリゲネスの未知の文書の発見ということで画期的なものであるが、それ以上にディデュモス研究に大きな飛躍をもたらしている。ディデュモスはアレクサンドリアの教理学校の校長として、三九八年に没している。ヒエロニムスとルフィヌスは彼のもとで学び、彼らがオリゲネスの著作をラテン語に翻訳するのは彼の影響によるものである。ところが、彼の著作は、トゥーラ文書の発見まで、ヒエロニムスのラテン語訳の『聖霊論』と僅かな断片が伝えられて来たにすぎなかった。その他の作品として、十一世紀の写本によって、一七六九年に出版された『三位一体論』があるが、その真正性は問題とされてきた。このトゥーラ文書の発見の前には、それをディデュモスの作とする説に傾いていたが、この発見で、問題は再燃し、目下、真二つに分かれている。

年 代

これらのバピルス写本は、いずれも六世紀末から七世紀初頭にかけて筆写されたものと考えられる。この写本が発見されたカイロ近郊には、当時、アルセニウス(354⁽⁵⁾—439/50)の修道院があったことが確認されることから、恐らく、この文書はその修道院のものであったとも考えられている。オリゲネスとディデュモスの文書がこれだけ集められているということは、当然、次のような推論に導く。つまり、五五三年のユスティニアヌス帝による異端宣告によって、彼らの著作の廃棄が命じられていた。このため、このような場所に隠匿されたのであろう。⁽⁴⁾

『ヘラクレイデスとの対話』校訂版出版・翻訳

これらの文書の中で、まず注目されたのがオリゲネスの『ヘラクレイデスとの対話』であった。これらの文書の回収に初めからかかわったグロー(Octave Guéraud)が、一九四六年に、そこにみられる教説、語彙、文体からオリゲネスの作品に間違いないことを紹介し⁽⁵⁾、一九四九年には、シェレル(Jean Scherer)によって第一校訂版が出版された。一九五〇年、フリュヒテル(Ludwig Früchtel)がシェレルの校訂版に対して、幾つかの訂正を進言し、更に、一九五四年に、チャドウィク(Henry Chadwick)が本文批判をしつつ英訳を発表している。更に、一九五九年には、ビュエシヨ(Henri Charles Puech)とハドット(Pierre Hadot)が、ミラノのアンブロシウスの『ルカによる福音注解』その他と本書の結末部の魂の不死を論ずる部分との類似を指摘し、アンブロシウスがその論述において本書を踏まえており、本書に負っていることを明らかにした。

以上の研究を踏まえて出版されたのが、シェレルの第二校訂版である。

その後、イタリアで、一九七一年にジエンティリ (Giobbe Gentili) がイタリア語訳を、ロシエント (Gennaro Lomiento) が文体と修辭学の観点に立つ研究書を刊行し、一九七四年には、ドイツで、フリュヒテル (Edgar Fruchte) が詳細な注を付したドイツ語訳を刊行している。

注

- (1) Louis Doutreleau, "Que savons-nous aujourd'hui des papyrus de Toura?", *Recherches de science religieuse* 43 (1955), p. 161.
- (2) Guéraud, Origène II: Sur la Pâque, p. 19.
- (3) Cf. Lefort, *The Journal of Ecclesiastical History* 2 (1951) p. 143 n. 3.
- (4) Cf. H. Chadwick, *Alexandrian Christianity*, p. 430.
- (5) 以下で言及する論文、出版物に関しては、本書巻末の文献を参照されたい。